

し、正保年中、下村が店のびなんかつらの引札一枚紙今にあり、目標も名も今にかはらず、めでたき
舊家ゆゑ、兩目の名も残りしならん、店前におしろい凸のかんばんありて、そのうへにびなんか
つらのたばねたるをのせおくをみて、むかしを去のびしが、今はみえず、

〔世間娘氣質〕男を尻に敷金の威光娘

いにしへは女のきやらの油をつくるといふは、遊女の外稀なる事成りしを、今は娘の子の臍の
あとまでに、伽羅の油をぬる事にして、毎朝頭に五兩入の曲物一ツづ、はんまいの外に入目と
算用せねば、うつかりと女房はもたれぬ浮世ぞかし、

〔嬉遊笑覽容儀〕賢女心化粧といふ草子に、姑六十年以前の事を定規にして、嫁のかみゆふをみる
に、伽羅の油を付らるゝがあれば、武家がたの中間奴などが、髭にてぞ付る物なるに、女のあたま
に付るとは、あんまりけうとい事なり、

〔近世女風俗考〕伽羅の油と鬢付油の同物なる證は、渡世商軍談刻梓の年號を欠、案するに享保元文の頃か、八文字自笑作、甚九

郎、京にて聞はつり置たる、蠟をさらす事をふと思ひ出し、家戸の灯挑にとりつきし蠟燭の流れ
を取て、こゝろみに調物あはせものをして曝し見るに、白く唐蠟の如くなれり、サア銀まふけは極りぬと、夫

を江戸を廻り、蠟燭の流れ買出し、是を晒て伽羅の油に思ひつき、堺町近くに店をかり、白梅香白
煉といふ伽羅の油を仕出してより、御屋敷がたを始め、町中から買に集り、わづか二年たゝぬ間
に千兩といふ金をため、諸方へ出店を出し、手廣くするに、去たがひ、日々繁昌して、伽羅甚といふ
名を取り、是が鬢付でなければ買はぬやうにはやりし故とあり、伽羅油と鬢付をひとつにい

鬢付油

〔嬉遊笑覽容儀〕びんつけといふは、上にいへる伽羅油なり、故に是も下村などの油の紙袋には、今
もきやらの油と記したり、箕山が色道大鑑延寶六年の序ありびんつけは、花露、伽羅油を用ゆかたきもや
きなべて鬢付といふ、す油は松脂煉は鬢枯てあし、蠟ねりをよしとす、又鬢を梳る事を云處に、油